

# センタージャーナル

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016  
名古屋市中区橘二丁目8番55号  
TEL (052) 323-3686  
FAX (052) 332-0900



いわき市薄磯地区

震災前はたくさんの海水浴客で賑わい、日本一を自負するかまぼこ工場が軒を連ねていた。残った建物の土台に描かれている絵は、仮設住宅からこの先の学校へ通う児童たちのことを考え、ボランティアが描いたという。

(写真の無断転用はご遠慮下さい。)

立つ！  
いのちの大地に  
聞く！  
いのちの叫びを

真実の学びから、  
今を生きる「人間」としての  
責任を明らかにし、  
ともにその使命を生きる者となる。

## もくじ

- ・ 講義抄録  
差別と解放の歴史を考える ②・③
- ・ 尾張のお講レポート ④
- ・ 教化センター研究生報告 ⑤
- ・ 講義抄録  
真宗儀式の教相 ⑥・⑦
- ・ INFORMATION ⑧

◆ 挟み込み(※寺報などにご利用ください)

## 同じく悲引す

一九六二(昭和三十七)年に真宗同朋会運動は、宗祖七百回御遠忌を勝縁に発足した。ちょうど同じ年、世界は第三次世界大戦の勃発寸前にまで達していた。日本でも、人間が人間に加えた汚濁、公害が起っていた頃であった。人間の尊厳が奪われ、苦悶のうちに亡くなる生々しい死の現実。御遠忌後の真宗同朋会運動の歩みは、このような時代社会が抱える危機的状況と共に歩み、宗祖御誕生八百年・立教開宗七百五十年の御仏事も厳修されたのである。人間の尊厳を回復せしめようと、阿弥陀仏の本願を宗とする運動こそが、この真宗同朋会運動の本質であったに違いない。

あれから半世紀。世界を見渡せば紛争は絶え間なく続き、格差、貧困、さらには原発事故による放射能汚染。ここには大飯原発の再稼働発表。まさに未だ濁世の相が世の中に蔓延しているように感ぜられる。生まれた意義も見出せず、生きる喜びも感じることのない私の課題はどこにあるのか。あらためて宗祖御誕生八百年・立教開宗八百年という節目に向けての歩みのなかで、この身の事実から知らされる課題を見つけねばならないのである。

宗祖はこのような時代を生きる私に、人間の現実存在を明かそうと「像

末法滅、同じく悲引す」と教誨される。自己の能力を過信するあまり、実の如く修行する者がいない時代を末法という。その時代の中、人間の努力次第で何でも出来るという傲慢心が旺盛なため、生まれた意義も、生きる喜びも感じられない。そのもとを「人知の闇と信知せよ」と、誨えていて下さるのである。

而して私の現実には、不安と怒りを胸に、反原発という「正義」を標榜してみたり、失業・格差・貧困の現実を突き付けられ、「原発容認も認めざるを得ない」と思ってみたり、正に若存若亡の只中をさ迷っている有様である。

正義が私を盲目にさせ、私を見えなくし、事実には多くの側面があることを忘れさせる。今こそ、人間の愚かさに帰らねばなるまい。原発を推進した者、反対した者、恩恵を受ける者、被害を被った者、そして傍観している者、皆が共に仏から常に大悲されている身なのである。

人間存在の悲しみを、私の悲しみとして受け止めた如来の御教えが響いた時、あらゆる人々の悲しみも観えてくるのであろう。上載の写真に描かれた花々が「共に」の世界を、そっと伝えていてくれる。この名古屋の地にも、故里を憶うた皆さんの被災者がおられることを心にとどめておきたい。

(教化センター主幹 荒山 淳)

## 講義抄録

2012年2月20日

## 差別と解放の歴史を考える

上杉 聡氏

(大阪市立大学人権問題研究センター)

前回に引き続き、教化センター研究生も受講している第八期解放運動推進要員研修の第二回目の上杉聡氏の講義抄録を掲載する。今回は特に親鸞聖人と部落差別との関わりについての講義をいただいた。

## 親鸞の思想を育んだ部落の人々

前回は、歴史に限定して、部落問題とその起源についてお話ししました。今日は前回をふまえ親鸞聖人(一一七三年～一二六二年)の教えについて考えたいと思います。親鸞聖人は部落差別が社会の雰囲気として生まれ始めていた時代に生きておられました。しかも部落差別の発生地であった京都におられましたので、親鸞聖人は差別されていた人々を意識した上で、様々な書物を著されたと考えています。

ただ、親鸞聖人が活動されていた頃には、まだ「穢多」という言葉は発生していません。しかし、もう部落は発生していました。『小右記』(一一〇一五年)の記述によれば、葬祭のために穢れを払う清掃(道端の死体処理など)が、警察及び清掃を担当する役人であった検非違使に命じられています。部落の人たちは、その検非違使から「キヨメ」として、清掃の仕事を命じられ始

めます。これにより、職業的にひとかたまりの集団として部落が把握されていき、この頃が部落形成の始まりの起源と考えられます。

こういう背景を考えた上で、次に『天狗草紙』(一二九六年頃)と呼ばれる史料を見てみましょう。これは、肉食などをするお坊さんを天狗に例えて批判した話です。この話の中に、穢多と呼ばれる人々が河原で毘を仕掛けて鳥を捕まえる絵が描かれています。その毘に使われた肉を、酔った天狗(僧侶)が食べようと捕まり、穢多の子供に首をひねられ殺されてしまう、このような物語と絵が進行します。そこに出てくる穢多の人たちは、残酷で恐い人たちとして描かれているのです。しかし、彼らは、「キヨメ」として警察や清掃の仕事をしたり、他にも井戸掘りや庭造りなどの肉体労働の仕事も担っていました。そういう様々な仕事を担っていた人々が多く住んでいたのが河原なのです。そして、「キヨメ」の仕事が無い時は、鳥を捕まえて生計を立てていました。『天狗草紙』に描かれていた、鳥を捕まえる姿は、部落の



人たちのほんの一コマだけなのですが、そのみを取り上げ、「穢多は恐ろしいものだ」と吹聴しているのです。このような差別意識が、当時の社会には存在していました。

## 仏教がもたらした差別

こうした部落差別の発生に大きな影響を与えたのは仏教でした。「穢多」という言葉が初めて見られる文献に『塵袋』(一二七四年～一二八一年頃)があります。これを書いたのは真言宗の僧侶だといわれていますが、そこには「天竺三旃陀羅ト云フハ屠者也。イキ物ヲ殺テウルエタ体ノ悪人也」とあります。インド(天竺)に「チャンダーラ」と呼ばれる人たちがいて、これを中国で「旃陀羅」の文字をあてるようになります。「旃陀羅は屠者であり、「エタ」のような悪人である」と書かれていることから、天竺に存在した差別の情報、中国を経由して日本に伝わっていたことがわかりま

す。また、伝えられた仏典の中には、ヒンドゥー教によってゆがめられた仏教の教えも存在していました。

仏教に悪影響を与えた一つに、紀元前後に作られた『マヌ法典』というヒンドゥー教の聖典が挙げられます。内容を少し見てみますと、「チャンダーラとシュヴァパチャとの住所は村落の郊外たるべく」と、あります。「シユヴァパチャ」とは「犬を料理する者」のことですが、日本でも確認されることに、差別された者の住居を町外れに置くという部落差別のやり方があります。それは、この『マヌ法典』にまでさかのぼるのです。そして、「宗教的義務を遵守せんとする人は、かれらとの交友を冀うてはならぬ」と、宗教者は彼らに近づいてはならないし、交際もしてはならないと書かれています。

仏教の『法華経』でも「宗教者は屠者の人たちと交際してはならない」と書かれています。また、平安時代に空海が著した『性霊集』には「我および仏弟子に非ずば、いわゆる旃陀羅、悪人なり」とあります。私の教えに従わない者は旃陀羅、悪人だと言っています。これがインドから中国に伝わった真性仏教なのだと信じて、空海は日本に伝えたのです。その意味で、ヒンドゥー教的な差別思想を日本に最も早く伝えたのは、実は仏教だったのです。しかし、仏陀は『スッタニパータ』で「生まれによって賤しい人となるのではない。生まれによってバラモンとなるのではない。行為によって賤しい人ともなり、バラモンともなる」と言っています。仏陀の教えは、家業の仕事として犬殺しをしているマータンガを差

別するようなものではありませんが、では、どこまでが本来の教えで、どこからがゆがめられたものなのか、そのことをしっかりと見極めなければなりません。

### 悪人こそ救われる

そこで、親鸞聖人はどのように語られたのかを見てみたいと思います。『唯信鈔文意』には「屠は、よろずのいきたるものを、ころし、ほふるものなり。これはりょうしというものなり。(中略)みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」(聖典五五三頁)とあります。ここで述べられているのは、『塵袋』にも出てきた「屠者」です。動物を殺している人であり、「りょうし」とも呼ばれました。それを「われらなり」と言って抱きしめておられると私は思います。こうした考え方は『歎異抄』にも出てきます。聖人は動物だけでなく人についても、「わがころのよくて、ころさぬにはあらず。また害せじとおもうとも、百人千人をころすこともあるべし」(聖典六三三頁)と、述べておられます。鎌倉時代は軍事技術の発展により、百人千人殺すことも可能な時代になっていました。現代は、ボタンを押すだけでさらに多くの人を殺すことができる時代になってしまいました。



班別座談の内容を発表する研究生

少し話がそれるかもしれませんが、原爆を落としたエノラ・ゲイのパイロットは、悪人なのでしょうか、それとも善人でしょうか。善い人間だったら殺人ボタンを押さないうちか。ボタンを押さなければ軍法会議にかけられて死刑になるかもしれない。そういう問題を我々は抱えていることを指摘しておられるのだと思います。親鸞聖人の問いは、実はものすごく現代的です。これには回答がありませんが、そこを「煩悶しろ」と親鸞聖人はおっしゃっているのだと思います。こういう現代意識のもとで、『歎異抄』は読むべきではないかと思えます。

自身が百人千人殺すこともありうる悪人(屠者)であることを知って初めて、極楽往生できる。それでやっと己の努力を捨てて、弥陀の本願にすがることができるといのが悪人正機説だと私は理解しています。ですからここで、はっきりと部落の人たちを眼前においておられる。まだこの時代には「穢多」という言葉はありませんが、「屠者」という言葉がありました。「屠」ということは『唯信鈔文意』にその言葉を使い、ちゃんと「りょうし」だと書いてあります。そういう点から、当時の社会観や差別をよく

表した『天狗草紙』に対抗していくものとして、『歎異抄』や『唯信鈔文意』を位置付けることもできます。

もう一つ、『口伝鈔』の中に、親鸞聖人が袈裟を着けてお肉を食べていた話があります(聖典六五七〜六五九)。それを見た子供が「みなは肉を食べるときに袈裟を脱ぐのに、なぜ着けたままなのか」としつこく尋ねるので、すると「私はこれで動物を解脱させている」と答えられた。当時の人からすれば、袈裟を着けて肉を食べるのは外道のやることでしょう。そこに宗教者としての宣言があると思います。動物を殺して何が悪いのか、そのいのちをもらって生きるしかないではないか。「解脱をさせる」というよりは、「宗教者として私は食べている」と言いたかったのだと思うのです。

親鸞聖人が語られたものを読む限り、「悪人」の中に狛師が入っています。『塵袋』には「エタ体ノ悪人も」とあります。悪人の中に穢多も入るのです。仏教的に見てそうです。真言宗の教え、空海も「旃陀羅、悪人なり」と言っています。そういう中で、部落の人たちが救われるということを当然のこととする仏教の根本理解が、親鸞聖人の教えの中にあつたのだと私は疑いません。

### 差別は無くせる

最後に、松浦静山が書いた『甲子夜話』を読んでみたいと思います。江戸末期、一八二三年に東本願寺が火事で燃えた時のことが書かれています。「京東本

願寺自火にて焼亡す。(中略) 本堂に火移りしとき、宗旨の穢多ども二百人余馳集りて消防せしが、火勢盛んにして防ぎ留めがたく、其辺往来も協がたく成ると、半の人数は門外へ逃れたりしに、残る百人計は本堂とともに灰燼と成て失ける。その後生残りし穢多、またその間に合ざりし者等打こぞりて後悔し、本堂とともに焼死せし者は真に成仏して、来世は穢多を離れて平人に生れ出べしと、皆羨しとなり。なぜ部落の人たちは自分の身を投げ出してまで極楽往生したいと思つたのでしょうか。それは、本当は生きていたのですが、この世が辛すぎたのです。そういう時、親鸞聖人の教えに出会つたのです。

「あの世」にもっと現実性があつた時代、「この世が辛くても、死んだら仏さまになれるよね」とみんなで慰め合つていた時に、部落の人たちはあの世でも救われたい、地獄に墮ちると言われてきた。それに対して親鸞聖人は「あなたたちこそ救われる」と言われた。それがどれだけ人格の尊厳の覚醒になったか。このことをまず知っておくべきではないでしょうか。生き物を殺す人を皆が嫌い、差別をしていた時代に、そのような人々を「私と同じだ」と言いきって生きた。このような聖人の生き様が仏教を読み交える力を与えてくれたのだと思います。そして、皆がその立場に立つたならば、部落差別は無くなります。だからこそ親鸞聖人の教えに責任を持っていただきたい。そうすれば、真宗のまわりから部落差別は無くなるかと私は思っています。私は真宗に期待をしています。

## 尾張のお講レポート

## ―奥田堀畑と中河原のお講―

はじめに

前回は中島郡会の四つの小会についてレポートしたが、その際、背景に小会を支える各集落の講が存在していることを述べた。ただ、紙幅の都合で内容については何も紹介できなかったが、今回はいくつかある講の中から一例として、稲葉組の背後にある稲沢市奥田堀畑町の講組を紹介してみたいと思う。それともう一つ、これは中島郡会とは関係ないが、清須市の中河原地域の講もこの場を借りて紹介させていただきたい。実はこの講組は、大谷派と本願寺派の門徒が宗派を超えて寄合うという、非常にめずらしい講組なのである。

## 一、奥田堀畑の月並講

この講の同行は八軒。そもそもは十軒であったが、二十八年前に一軒、そして六年前にもう一軒途絶えてしまったという。『御消息』はなく由来もよく分からないが、講として所有する『御文』（五帖目）があり、真如上人の証判であることから、元禄期かそれをさほど下らない頃には、存在していたのではないかと思われる。

毎月の寄合は、月一回、二十七日の午後八時からであるが、六年前までは月二回、七日の同時刻からも行われていたという。会所の宿は同行各戸の持ち回りで、前月の宿の者が寄合当日に、先述の『御文』を持って行くことになっている。そして、長老を調声人として門徒同行のみで、『正信偈』草四句目下・『和讃』一弥

陀成仏のこのかたは」次第六首が勤められ、五帖目第一通「末代無知」の『御文』が拝読される。また、もともとこの講は各戸の男衆が基本で、昔は他に女人講も年一回、十月頃に寄合を持ち、双方とも昔は必ず着物を着て寄合ったものだという。

次に、「御仏事」と称される講としての報恩講に触れておきたい。報恩講は毎年十一月二十七日に、朝から全員で同行の各戸を順番に回り、『正信偈』草四句目下・『和讃』「五十六億七千万」次第六首をお勤めする。最後はその年の報恩講当番の家が宿となり（毎月の寄合とは別）、お勤めの後にお斎が用意され皆で相伴する。以前は、最後の宿の家に、稲沢市奥田町の正本寺住職が報恩講の時のみ来て導師をつとめたが、今はそれはなく、すべて門徒のみでお勤めしているという。かつてはさらにその他に、「御正當」と呼ぶ法要があり、『正信偈』草四句目下・『和讃』「善知識にあうことも」次第六首にて勤められていたというが、詳細は分からない。

なお、正本寺との関係であるが、正本寺門徒は八軒のうち六軒で、全てが正本寺門徒という訳ではないが、ただ、所謂「講下（コーシタ）」の関係で、毎年年番が二人、順番に正本寺の報恩講にお取り持ちに行くことになっている。ちなみに正本寺では「大お講」といって、毎年二月の第一土曜もしくは日曜日に、「講下」関係にある各講組から二人ずつ出そろっ

て、寺の一年の行事とその役割分担を決める寄合があるという。

さて、このような地元の地域共同体である月並講が、どのように中島郡会のような大規模講と関わっていくのであろうか。中島郡会はいくまで旧中島郡地域の有志門徒による任意団体であり、各講組の代表が出るという訳ではない。しかし、この講の同行であり、なおかつ中島郡会副会長の吉田勇夫氏の次の言葉にあるように、郡会が存続してきた基盤に各集落の講があることは明らかである。吉田氏は、「月並講に出るようになり、先輩から声をかけられて中島郡会に入りまして」と語られるが、記録にも残らず、決して歴史の表舞台に立つこともないような、地域共同体としての講組織によって真宗本廟の護持が受け継がれ、法義が相続されてきたことを再確認しておきたいと思う。

## 二、中河原お講組

中河原は、現清須市の庄内川と新川に挟まれた地域のうち、豊公橋をやや上がった新川側の地名である。この地域には現在約百四十の世帯があるが、そもそもムラの集落は十三軒であったという。ただ、この数字も明治以降のもので、それ以前の江戸期はもっと少なかったようである。記録がなく詳細はよく分からないが、江戸中期には現在の原型となる集落が形成され、ムラが誕生していたと思われる。そして、そもその十三軒がすべて二つの寺を手次とする真宗門徒であり、軒数が少なかったこともあって、この十三軒で講が組まれることになったという。

さて、この講について特筆すべきこととして、手次寺の宗派が異なっているということがあがる。一ヶ寺が清須市清洲の

真宗大谷派・久證寺。もう一ヶ寺が西区枇杷島の浄土真宗本願寺派・西源寺。つまり、お東とお西の門徒が毎月合同で寄合ってきた、全国的にも希有と思われる講組なのである。調査に入った時にはすでに、久證寺門徒が三軒、西源寺門徒が六軒の計九軒となっていたが、毎月二十七日の午後八時より宿を順番に持ち回りながら寄合ひ、『正信偈』・『和讃』「弥陀成仏のこのかたは」次第六首を門徒同行のみで勤めているとのことであった。平成七年まではこれ以外にもう一日、お東の門徒宅が宿になる場合は十四日、お西の門徒宅が宿になる場合は十七日にも寄合が持たれていたそうだが、宿元の家宗派によってお勤めも、お東とお西のものを使い分けるといふのはとても興味深かい。講中共有の『御文』・『御消息』等は特になく、お勤めの際は各宿元に備わっている『御文』を読み上げるが、この時は調声人でもある長老が拝読することになっている。

また、講としての報恩講であるが、毎年十二月の第一土曜日に、その年の報恩講の宿元（毎月の寄合とは別）を基準に、手次寺は関係なく二組に分かれ、この時だけは久證寺住職と西源寺住職がそれぞれ導師となり、各組一軒ずつお勤めして回り、最後に宿の家で午後五時に全員がそろってお勤めする。この時、宿の家がお東の門徒なら、久證寺住職がお東の節で『正信偈』・『和讃』をお勤めし、お西なら西源寺住職がお西の節でお勤めすることと、たまたま調査に入った際の宿はお西の門徒宅であったので、お西の節で報恩講がお勤めされていた。そしてその後には、宿でお斎が振る舞われ相伴となるが、さらに長老の話では、昔は十三年に一度報恩講の宿が回ってくるの

で、それに合わせて仏壇を洗ったものだとのことであった。

このように地域の共同体として、時には宗派の違いも超えて寄合えることをこの講は教えてくれるが、そうして寄合いながら念仏を相続してきた真宗門徒の姿を、忘れてはならないであらう。



報恩講宿でのお勤め。(導師は西源寺住職。)

(追記) ただ残念ながら、調査直後の平成二十三年以降、この講は寄合・法要を休止中である。

以上、今回は二つの地域講を見てみたが、ひとくちに講といっても、実に様々な形態があることを改めて知らされた思いである。いずれにしても真宗の講組織というのはい見すると一つ一つ単独で存在しているようであるが、決してそうではなく、多層的かつ多角的に組み合わせたり、法義相続の歴史を刻んできたといえるのである。

(研究員 小島 智)

# 研究生 真宗本廟奉仕研修

2012年5月15日〜17日

お寺にいなから、教えや門徒さんに向いてない私、このままで大丈夫？

(第6期研究生 加藤 烈)

教化センター研究生として真宗本廟奉仕研修に参加しました。今回研究生として真宗本廟奉仕研修に参加するのは三回目になりました。昨年は御遠忌の期間と重なりまして、御遠忌ボランティアとして団体参拝にいられた方の案内や支援助資の運搬などのお手伝いをさせていただきました。

今回は、清掃奉仕、諸殿拝観、ご修復現場視察、教導・補導による講義・座談などのカリキュラムに従い研修を行いました。

講義・座談の時に「お寺・お坊さんとは一体どうあるべきか」、「どうやったらお寺に人が集まるのか」、「なぜお寺は入りづらいのか」など、普段からそれぞれが考えていることを話し合いました。

その中でも「お寺はこれから先やっていけるのか」という話しになり、このままではお寺がダメになるという危機感はあるけれど、「お寺側が人を呼ぶ努力をしない」、「心配しているのはお金の面だけではないか」ということが話し合われ、まるで自分に言われていることのように感じました。

その危機感はお寺の運営ばかりに目が

いき、教えや門徒さんの方を向いていないということがわかりました。あらためて「お寺・お坊さんとはどうあるべきか」ということを課題としていきたいと思いました。



## 真宗本廟奉仕は、一度立ち止まって日常生活を振り返る場 (第8期研究生 石原 唯和)

今回、研究生として真宗本廟奉仕研修に初めて参加させていただき、正直最初は大変だなと当日まで思っていました。しかし、研修に参加して普段の生活から離れ共同生活をするにより、気が付かされるものがありました。研修中に何度か座談会をすることにより、普段から疑問に思っていることを聞くことが

できました。また、疑問にすら思っていなかったことでも、改めて聞かれると考えさせられることも多くあり、普段忙しい忙しいと理由をつけて疑問を持つても深く考えず勝手に終わってしまったことにし、考えることをやめていた私に気が付かされました。研修中は疑問や自分自身について落ち着いて考える時間を得ることができました。二日目に行った清掃奉仕では、渉成園の草取りと御影堂の畳の雑巾がけを午前から午後にかけてさせてもらいました。とても広く全体を清掃することはできず、部分的にしただけでした。一人の力では到底成り立つものではないということを実感しました。研修に参加することにより、一度立ち止まって生活を振り返り考えることができました。真宗本廟奉仕研修で得たものを研修中だけで終わらせたことせず、普段の生活でも研修で気付かされたことを大切にしていきたいと思えました。



## 講義抄録

2012年4月6日

〈研究生「教化研修」〉  
「真宗儀式の教相」たけはし  
竹橋ふとし  
太  
(本廟部出仕)

第9回



(聖典六三四)

## もつと自由に

真宗同朋会運動は、この七月から五十一年目に入ります。推進員養成講座や特別伝道など、宗派が行うことだけではなく、一人一人がお念仏の教え、真実そのものを聞いていくことが願われた運動です。だからこそ、我々にとっては凡夫の運動、つまり凡夫が凡夫である事を明らかにしていくような運動であるはずで、しかしながら運動ですから、世の中の動きの影響もありますし、どうしても目標を定めて、成果がなくてはいけないということ、善を指すという方向があったかと思えます。また、部落差別問題をはじめ、さまざまなことが問われました。そこで出会いもありましたし、また見失われてきたこともあるように思えます。

仏法を学ぶということは、「自由に生きる」ということをいただくのだと私は思っています。こうあるべきだ、もつと善く、もつと純粋に、もつと進歩する、失敗しないようにうまくやっていく。そのために仏教がある、本当でしようか？私が凡夫である。悪人である。煩惱成就しているということがはつきりする事、

だからこそ、どう生きるか自分自身で考えることが出来る、それが仏教、浄土真宗ではないでしょうか。一切無条件の世界をいただく。そこで考える、ということとです。

私たちは、自分がまずあって、その善悪の物差しを基準にして生きていくという事をまず疑うことはありません。その自我ということの問題にしないまま、自分の持っている善悪というものを研ぎ澄まし、もつといい人間になつていこうと考えています。そこで真宗の教えも聞かれています。しかし、その無意識に前提とされている「私そのもの」が問題にならないで、仏教・真宗にはならないのだらうと思えます。

## 真と仮

実は、その私そのものは「たまねぎ」なのです。皮ばかりで芯がありません。宗祖は

さるべき業縁ごうえんのもよおせば、いかなるふるまいもすべし(そうするよくなご縁があれば、どういうことでもしてしまふ)

とおっしゃっています。「縁が自分になる」のであって、「自分がいて」ご縁を頂くのではないのです。自分というものは結果からしかわからない。こうしないように、ああしないようにというのは仏教のめざす本質ではないのです。思いを超えた自分自身のあり方に応答するものなのです。

そういうあり方を、釈尊は「無我」、宗祖は「仮」ということばでおっしゃっています。それは例えば、仏と私たちが別々に存在して、それが何かの拍子にであうのではないことです。仏とてあつた我々が凡夫であり、凡夫だという目覚めを与えて下さったはたらきを仏と呼ぶのです。そこにだけ仏がいらっしゃる。同時に成立するのです。「仏にであつた凡夫」というのが「わたし」の中身なのです。その出会いの瞬間が「南無阿弥陀仏」と表現されているのです。

このことは宗祖において、真仏土と化身土の関係として述べられているよう

## 真仮を知らず

このことは宗祖において、真仏土と化身土の関係として述べられているよう

に思います。それは私たち一人ひとりに法、真実がどのように現れるのかという問題を明らかにしています。

すでにもつて真仮しんげみなこれ大悲の願海に酬報しゅうぼうせり。かるがゆえに知りぬ、報仏土なりということ。まことに仮の仏土の業因ごういん千差なれば、土もまた千差なるべし。これを「方便化身・化土」と名づく。真仮をしらざるに由つて、如来広大の恩徳を迷失す。これに因つて、いま真仏・真土を顕す。

(聖典三二四)

これは「真仏土卷」の結論部分です。真というのは真仏土、仮とは方便化身土のことです。なぜ二土なのでしょか。それは、その二つがないと、我々がすぐわからないからです。「仮の仏土の業因千差なれば、土もまた千差なるべし」とあるように、我々はたくさん縁で成り立っていますから、それぞれに応じた浄土が化身土としてあるわけです。もちろん報土ですから、本願によつて立てられた仏の教化の土であるわけです。しかし「業因」ということばがあるように表現の素材は我々衆生の側にあるわけです。私の世界に仏の方から現われてくださるわけです。

そして「真仮を知らざるに由つて、如来広大の恩徳を迷失す。これに因つて、いま真仏・真土を顕す。」とあるのは、つまり、真と仮ということの区別をきちんとしてもらいたいから、今、真仏土を説いたというわけです。「仮身土卷」の「後序」にも

しかるに諸寺の釈門、教きょうに昏くらくし

## て真仮の門戸を知らず

(聖典三九八)

とあります。真仮を知らないということ、自分や自分のしていることは真だと思っているということ。良いこと、正しいことをしたら仏になっていくということ。こういう人は、なぜ釈尊の証(さと)りが真の仏土と仮の仏土として説かれたかということが、分かっていないということ。

我々は今この身では真仏土には生まれられないのです。そういう我々のために化身土が説かれています。我々は形の世界を生きていますから、その私たちの言葉、表現に下りてきた阿弥陀さまを化身というわけです。だから浄土について述べられていても、それは二つあるわけです。我々を照らすはたらきは真仏土と呼ばれ、光そのものなのです。その光に照らされるのが私です。つまり、光の世界、真実は真仏土であり、照らされる世界を化身土と言います。

照らされるということにも二つの意味があります。縁起している仮なるものを、自我を通して真なるもの・永遠なるものとしてしまうこと、つまり「まよい」が知らされること、そしてそのまよいを含めた私の世界も縁起したのだと知らされるということ。そういう二面性を持つているのが、仮の世界です。それを知ることが「すくい」に他なりません。

## 此岸と彼岸／穢土と浄土

釈尊在世中、対機説法がなされ、そして、釈尊が認めれば仏道は成就したこ

とになります。しかし仏滅後は釈尊が出会った法に自分も出会って、同じく仏になる大乘仏教が現れました。そこでは法と出会い(このことをどの経典も「仏と出会う」と表現しています)自ら仏と成っていく場所を浄土といっています。最初は「他方浄土」ですから、此岸と彼岸です。しかし『法華経』や『維摩経』などでは、「娑婆即寂光土」、この世こそが浄土であるという表現がなされます。ある意味では一段階前進した表現です。今ここに法がはたらいている。この土が浄土であり釈尊こそがあらゆる仏の本体であるということ。

しかしそこに新しい問題が生まれます。さらにその釈尊の本体は私だと言いつつ出する人が出てきます。これが一土であることの問題です。私がこの土で仏になるということの問題なのです。浄土と穢土の境が見えなくなってしまうのです。これはあくまでも人間の問題であって、教えそのものの問題ではありません。

それに対して親鸞聖人の仏教は、どこまでもすくう側に立たず、すくわれる側に立つのです。「私が正しい」とは一切言えない凡夫だ、悪人なのだと自己覚こそがすくいである。それは「真仮を知る」ということに拠るのです。

## 人間は誤るものだ

真実と虚偽は真仏土と化身土、仏と凡夫と同じく同時に成立するものです。それを形にしたものがお念仏です。南無といつて私の頭が下がっている、そこには仏がいる、頭が下がらないかぎり、仏はいらっしゃらないのです。それを目に

見える形で表現しているのがお念仏であり、儀式です。形が決まっているので、どういう気持ちであろうが、一応成り立つようにできていくわけです。一緒に正信偈を読み、南無阿弥陀仏と頭を下げているその姿全体、本堂全体が阿弥陀さまがいらっしゃる世界、釈尊の説いた世界を現しているのです。だからこそ私自身が、本当に頭が下がっているかということが問われるわけです。

何度も言ってきたように声明や儀式によってすくわれるのではなく、本願が声明や儀式という形にまでなっていくこと、いただけるかどうかということ。



親鸞聖人は「七宝講堂道場樹 方便化身の浄土なり」とはつきりと示しているらしいです。形として現われる浄土は方便化身土です。しかし「講堂道場礼すべし」ともあります。方便化身土からだめなのではなくて、方便化身土として仏法が表現されている、それが大事なのです。しかしそれは方便化身土だからすぐにまた転落するということでもありません。それは当に私たちに与ったのすくいのある方でもあるわけです。方便化身土だと明らかにされるのが大事なのです。

ですから儀式は容易に我々の善悪の世界の中に取り込まれていきます。自己肯定につながりやすいのです。仮を真なるものとしてしまう「偽」です。道場が尊いのではなくて、道場とまでなった本願は礼すべきものであるのです。むこうからやってきたもの、回向されたものとして受け取るから儀式も道場も尊いと言えるのです。そういう受け取りがなければ無意味なものなのです。かといって、より純粹な表現ができるというのも錯覚なのです。表現の素材はあくまでもこちらにあると知る。本来仏法を説く純粹な表現などないのです。

最初に、真宗同朋会運動の展開の中で、良い人間になっていこうというのには仏教ではないという言い方をしました。仏教は、人間は誤るものであり、失敗するものであり、偽者であることを知らせるものです。失敗しても構わないという場所が与えられるのです。だからこそ、よく考え、立ち止まり、喜び、悲しむことができるのではないかと思います。仏法を学ぶということは、自由をいただくことだと思っております。

## INFORMATION

## 研究生修了者からの報告

「ハンセン病療養所」の  
花見会に参加して

去る4月5日から6日にかけて、国立ハンセン病療養所の「長島愛生園」と「邑久光明園」を訪ね、真宗大谷派山陽教区が主催した瀬戸内三園合同お花見会（「長島愛生園」「邑久光明園」「大島青松園」）に参加した。

今回で2度目の参加となったが、実は前回、研究生在籍中に訪問した際に持参した名古屋名物の「どて煮」の味付けがあまり好評ではなく、「絶対にリベンジしよう」と、固く心に誓っての再参加であった。当日は春先の冷え込みもあって、開花には程遠い寂しい景色ではあったが、東海地方の名古屋教区や高山教区をはじめ、全国各地からの参加者もあり、総勢100名を超す賑わいだった。

今回、入所されておられる方々の話を聞く中で、ハンセン病に関する法律も無くなり、ハンセン病にまつわる負の歴史も消し去られていっていることに危機感を抱いた。差別と偏見だけが一人歩きをし、今なお多くの元患者が故郷に帰ることさえできない現実を目を向けようとしぬ私の問題、そして、人間の持つ差別性と差別構

造の上に成り立っている私たちの秩序など、本当に多くの課題を改めて感じさせられた。

ちなみに、「今年こそは」と改良した「どて煮」は、なかなかの好評をいただき、一先ずリベンジを果たせたらと思う。そして、ここで出会ったみんなに「もう一度会いたい」、「また来よう」と心に誓い、瀬戸内を後にした。

(25組三月寺 下間 寿昭(第4期研究生))



光明園の納骨堂(桜は二分咲だった)

教化センター日報  
■2012年3月～2012年5月

3月9日 研究生・実習「真宗門徒講座」  
13日 研究生・教化研修「伝道スタッフ養成講座」参加  
14日 HP「お東ネット」会議  
16日～23日 研究業務「第23回平和展」  
23日 研究業務(近現代)第23回平和展 反省会  
26日～27日 研究生・教化研修「東海連区推進員研修」にスタッフとして参加  
27日 研究生課題学習「真宗の未来(宗務施策を考えてみよう)」

4月6日 研究生・教化研修「真宗儀式の教相」竹橋太氏  
9日 HP「お東ネット」会議  
13日 研究生・実習「真宗門徒講座(釈尊伝①)」  
研究生・教化研修「伝道スタッフ養成講座」参加  
24日～25日 研究生・教化研修「解放運動推進要員1泊研修」参加  
25日～26日 全国教学研究機関交流集会(宗務所)  
27日 研究生・聖教研修  
「正信念仏偈に学ぶ」荒山淳氏  
30日 研究生・実習「お内仏のお給仕研修」スタッフ  
5月7日 研究生「別院奉仕研修事前学習会(別院主催)」清史彦氏  
9日 研究生・教化研修「解放運動推進要員研修」参加

研究業務(現代社会)  
「自死遺族のわかちあい」後援  
11日 研究生・聖教研修  
「正信念仏偈に学ぶ」荒山淳氏  
14日 研究生・教化研修「伝道スタッフ養成講座」参加実習「真宗門徒講座」  
15日～17日 研究生・真宗本廟奉仕団  
18日 研究業務(近現代)平和展 学習会  
23日 HP「お東ネット」会議  
28日 研究生・実習「真宗門徒講座(釈尊伝②)」  
29日 研究業務(現代社会)  
「自死遺族の方々のケアについて」  
公開講演会の後援

## お知らせ

## 第9期 教化センター研究生を若干名募集します。

教区・別院・教化センターの教化事業に携わりながら、共に学ぶ朋をみつけませんか。名古屋教区に僧籍を置く教師資格を有している40歳くらいまでの方、是非ご応募ください。詳しい内容については、教化センターまでお問い合わせください。

電話 052-323-3686(担当:蓮容)

## 公開講座にご参加ください (聴講無料)

## ◆教化研修「真宗儀式の教相」

※僧籍者対象

講師 竹橋 太氏 (本廟部出仕)  
時間 午後4時30分～6時  
期日 2012年9月7日(金)  
会場 名古屋教務所1階 議事堂

## 《編集子雑感》

本誌表紙の写真を撮影したのは、本年5月の金環日食の日のことである。写真には写っていないが、瓦礫の土台に描かれた花の他にも、本物の花が植えられ、ところどころの家々には亡くなった家族のために手向けられたものだろう花束が添えられていた。通りすがりの地元の方の話によれば、1,200人の方々がここで亡くなったそうだ。早朝の寒さに加え、あらためて身が引き締まる思いがした。しかし、不謹慎と思われるかも知れないが、青い海と白い砂浜、そして花と新緑の大地が織りなす東北の大地は本当に美しく、訪れるたびに感動してしまう。(K)



## ■教化センター

〈開館〉

月～金曜日 10:00～21:00

土曜日 10:00～13:00

(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉

書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～



寺報イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。

